掲載日:2025年08月23日,面名:OPOXXO,記事ID:K2025082300000015100
(C)河北新報社

座標

心沸く東北の祭り

革新・挑戦の意識 根底に

東北福祉大共生まちづくり学部教授
野呂　拓生
（仙台市）

東北の夏祭りが終わった。大半が平日となった今年は、ネットのライブ中継で青森ねぶた祭を楽しんだ。臨場感には乏しいが、私が青森市で学び、働いていた当時、祭りのさなかに体験した「じゃわめく」空気感、ぞくぞく、わくわくする感覚を思い出していた。

思い出しながらふと考えた。なぜ東北の祭りは心を沸き立たせるのだろう。そして、楽しめる形で伝統をつなげるのだろう。

祭りは地域の個性を体現する存在で、地域にはつなぐ責務があるからか。それだけで心は沸き立たない。非日常を体験できるからか。観光化が進み観客を楽しませるスタイルを確立したからか。いろいろな切り口で考えられそうだ。

学問分野によっては研究され、答えがあるのかもしれない。私はここで、祭りをつくる人々の意識に目を向けたい。彼らは伝統を踏まえながらも「今年はすごいぞ」をつくるから、祭りがわくわくしながら続くのではないか。このような見方をするのは、青森時代、ねぶた制作を担う若手ねぶた師から聞いた話がきっかけだ。

青森ねぶたは運行上の理由から大きさが制限されている。厳しい予算の制約もある。さらにねぶた師は制作全般のマネジメントも担う。伝統の様式、基準もある。これらの制約の中で、多くの人が抱くねぶたのイメージや先人の作品を超える、革新的で自分らしい表現を追い求めなければならない。とても大変だが、やりがいがあることだと言っていた。

経済学にはイノベーション、つまり既存の枠を超える革新や挑戦が経済を持続発展させるという考えがある。ねぶた師の根底にイノベーションの意識が見えたのだ。

私たちは変化を嫌う存在だ。「このまま」が続くことを望み、一度整ったシステムを変えようとしない。特に伝統は守るべき存在として捉え、前例踏襲が基本になる。しかし、守ることが難しくなるほどに環境の変化は著しい。その中、本当にこれでいいのか、もっと良くできないか、決められた枠内でも可能性は広がらないか、などと試行錯誤を重ねる。イノベーションの起点は現状を疑うことだ。疑問に向き合うことが次の道を切り開くきっかけになる。

ねぶたでは作り手が自らイノベーションを起こそうと挑み続けている。ねぶたとねぶた師をセットで見てほしい。作品の変遷を見てほしい。女性ねぶた師が登場し新しい表現が生まれ、ベテランも熟練の技で毎年驚くべき表現を見せる。若手ねぶた師が貪欲に新しい表現で挑みかかる。さらに運行、跳人（はねと）、囃子（はやし）などが全力でもり立てる。彼らの熱量を受けて地域はじゃわめき、子どもたちは憧れ、観光客はとりこになる。

全ての祭りがねぶたのように大きな挑戦をするわけではない。私の同僚のゼミでは、仙台市内の小さな商店街で毎年新しい視点で七夕飾りの制作に挑んでいる。

おそらく多くの地域で大小問わず挑戦が繰り返されてきた。だから懐かしくも新しく、豊かに続いてきた。熱く祭りをつなぐ東北は、地域は、誇るべき存在である。